3　民俗学普及の努力

1　輔仁大学と日本民俗学

満洲と張家口と連携して中国北方での共同民俗調査ともいうべき計画に強い意欲を示した背景には、直江がこの年の九月から輔仁大学講師という安定した職に就いたことは無視できない。

> 暫く自由な体でこつこつやつて居りましたが、九月から細井先生に捨（ママ）（拾）はれて輔仁大学で勉強させて戴いて居ります。
> 日本政府の寄附講座として文学院に日本語言文学系といふのが新設され、細井先生が主任になられましたが、その専任講師といふ名目で日本文学講読を受持つて居ります(55)。

細井は細井次郎（一八九七～一九七三年、図14）のことである。直江就職の具体的な経緯は不詳である。書簡にもあるように日本の言語、文学に関する学部の新設に伴う教師への需要が直接の理由であったが、直江が日本民俗学の関係者であることも関連すると思われる。輔仁大学や細井と日本民俗学との接触はもっと早くからあったからである。

直江の民間伝承の会入会を伝えたのは『民間伝承』四－九であるが、その前号四－八（一九三九年五月）に署名「北平輔仁大学　細井次郎」の通信を載せている。

> 御恵贈の図書は早速大学に引渡しました所、学長以下大感謝にて、殊にエーデル師は自ら抱き廻つて、使丁の

手に託さぬなど純情ぶりを発揮して居ります。燕京大学に一昨日訪問の際学長、Dr.Stewardに面会御趣旨を申伝へました処早速懇望の申出日支文化提携は次第にレールに乗つて来るか推測致します。

それに続き、両大学からの感謝の言葉も載せられている。

（北平、輔仁大学、M・エーデル）細井君は沢山の日本民俗学の書物を持つて来ました。輔仁大学が更にそんなに沢山の重要刊行物を頂きまして、ラーマン校務長も私も深く感謝致してをります。

（北平燕京大学 J. Leighton Steward）今朝細井君さんの訪問を受け、貴会御出版物を御恵贈下さいました。私達学徒にとつてよき贈物を得たことを幸甚に存じます。三月十六日

輔仁大学（Catholic University of Peking 一九二五～一九五二年）は戦前中国における数少ないカトリック大学の一つである[56]。教会大学の中でセントジョン大学（前身が一八七九年）や嶺南大学（前身が一八八八年）などと比べると創立は遅いが、輔仁大学は短期間で急速に成長し、一九三〇年代には、北京大学、清華大学、師範大学、燕京大学と並び北京の五大名門と言われるようになった。世界的な経済恐慌の影響を受け、一九三三年に、ローマ教会の命令でアメリカとドイツの神言会（Society of the Divine Word）[57]に移り、その後、政治情勢に対応するため、ドイツ人ラーマン（中国名は雷冕、Rudolf Rahmann. 一九〇二～一九八五年）が校務長（一九三六年九月～一九四六年七月）に就任し、大学

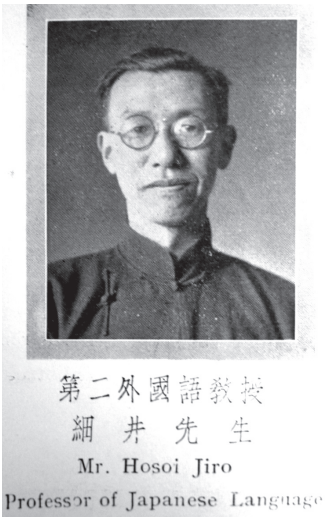

図14　中国服の細井次郎
出典：『輔仁年刊』1938年より。

の管理層や教員も次第にドイツ勢に変わっていった。

一九三七年盧溝橋事変後、大学は教会大学という立場を生かし、内地に移転した北京、天津、山東など華北地域の大学、そして戦争の進行で占領その他の影響を受けた他の大学の学生を収容していたが(58)、日本の軍部の圧力を受けて日本語の授業時間も増やしていった（表18参照）。

一九三八年七月、「剿共滅党運動週間」の中、日本軍の圧力の下で、輔仁、燕京両大学が日本人教員を雇うことを約束した(59)。九月に細井次郎は輔仁大学に第二外国語の教授として招聘され、大学初の日本人教員となった。最初は一年と三年の日本語を担当し、毎週十二時間で月給は三〇〇元であった(60)。一九三九年に鳥居龍蔵が燕京大学に招聘されたが、その背後に、輔仁大学の細井招聘の影響があったと考えられる(61)。

「輔仁檔案」によれば、細井の略歴は「第五高等学校英吉利法律科卒業、帝国大学文学部教育学科修業、東京成城学園教授、東京清泉寮学院校長代理兼教授」(62)とある。一九三四年に来日した聖心侍女修道会（A.C.I.Sisters）は一九三八年に東京麻布三河台に現在清泉女子大学の前身となる清泉寮学院を創立したが、細井は教会関係の紹介で輔仁大学に入った可能性が高い。一九四〇年に徳内松樹街延年胡同五号に移るまで、細井は輔仁大学内に住んでいた。

表18　輔仁大学日本関係科目教員表（1937～1944年）

1937年	魏重慶(5)、豊浮露(2－3)
1938年	細井次郎(12)、傅仲濤(21)、陳仲益(6)、＊葉徳礼(2)
1939年	細井(6)、八巻澄江(9)、陳(12)、傅(15)、王際憲(3)、魏(2-3)
1940年	細井(9)、嶋美恵子(9)、陳(12)、傅(12)、王(3)、魏(3－4)
1941年	細井(9)、嶋(6)、渡邊善次(4)、陳(3)、傅(6)、王(3)、魏(3)
1942年	細井、嶋、渡邊、酒井悌、川添達人、直江広治、上田辰之助、陳、王、魏、董文萃
1943年	細井、渡邊、川添、直江、藤原英夫、市川一郎、小林知生、山本捨三、伏木妙子、日名和子、陳、傅、王、魏、董
1944年	細井、渡邊、酒井、川添、直江、藤原、市川、小林、山本、伏木、日名、風巻景次郎、奥野信太郎、陳、傅、魏、白若愚、王汝瀾、劉廼穌

註：1941年までは日本語だけ、括弧内は時間数。＊葉は日本文明史。
出典：「輔仁檔案」より作成。

細井は赴任後、軍側が期待したような政治的な活動にはあまり積極的ではなく、一九三九年五月、日本大使館に輔仁大学図書館への図書寄贈を依頼するなど独自な文化的交流を図っていた(63)。輔仁大学側での細井評価は概ね良好であった(64)。

この『民間伝承』での通信では「御恵贈の図書」「日本民俗学の書物」「貴会御出版物」とあり、寄贈されたのは民間伝承の会の出版物であったと思われる。しかし、民間伝承の会側にはこの件に関する記録は見当たらず、歴年の新入会員にも細井の名前がなく、今のところ民間伝承の会と細井の関係が確認できていない。具体的なルートは不明であるが、しかし会員通信を見る限り、輔仁と燕京両大学は民間伝承の会からの寄贈だと理解している。戦時下日本民俗学の著作物が担った役割の一端を表している。

下って『民間伝承』六－一二（一九四一年九月）の「学会消息」に「ラーマン博士来朝」という記事がある。「在北京の輔仁大学総長R・ラーマン博士は過日、我国に来朝、その途に於て、柳田先生の書斎に訪れ、従来民俗学研究に携はつて来たが、今後特に指導提携を希望する旨、挨拶を述べる所があつた」とのことであった。

総長は総務長の誤りであった。一九二〇年代には中国側の教育権回収運動、教育宗教分離運動が起こり、一九二九年に南京国民政府が『私立学校規程』で外国系学校では中国人が校長に当たるべきと決めた後、一九五二年大学が合併されるまで輔仁大学の総長は陳垣であった。教会側の最高責任者が総務長と呼ばれ、校務の管理を補助し、大学を代表して国外関係の一切を処理する権限を持っている。一九三六年～一九四六年までドイツ人ラーマンはその任にあった。ラーマンは民族学ウィーン学派の定礎者シュミットの弟子で、当時『華裔学誌』(Monvmenta Serica)の編集長でもあった。一九四一年の一月に柳田国男は日本民俗学の創立と発展への貢献で「朝日文化賞」を受賞していた。九月の柳田宅訪問は、表敬の意もあり、「従来民俗学研究に携はつて来た」という表現からみれば、一九三九年の図書寄贈の返礼という意味も含まれていたのだろう。

間もなく太平洋戦争が勃発したが、その直後の十二月十一日に細井が「校務長主席秘書」として招聘され(65)、

さらに一九四二年六月九日に「日本文学系」（日本言語文学部）が増設され[66]、細井次郎が主任に就任した。それまで輔仁大学の日本人教員は細井の外、一九三九年九月に八巻澄江[67]、一九四〇年三月に八巻に代わって嶋美恵子[68]、一九四一年九月に渡辺善次が加わった[69]が、人数が少なく、課目もほとんど日本語に限定されていた。しかし日本言語文学部の新設に伴い、日本人教員が一気に増え、科目も文学、歴史に広がっていった。直江広治はこの時期に講師として招聘されたのである（図15）。

図15　中国服の直江広治
出典：『輔仁年刊』1942年。

2　民俗学教育普及の努力と効果

入学案内である『輔仁大学一覧』によれば、日本言語文学部の科目設置はわかる（表19、表20参照）。残念ながら一九四四年の一覧が見つからなかったが、一九四二年学部開設以来の学生である崔玉卿、邱孝石、林象賢、王大錚、楊振韶の成績記録があったので、それによって整理することができた（表21）。

注目すべきなのは、一九四三年九月から、日本語言文学部二年生の必修科目として「日本民俗学」という課目が開設され、週二時間で四単位、担当は直江広治であった（表20参照）。

表19　1942年度輔仁大学日本言語文学部科目一覧

甲：専門必修科	時間	単位	教　員
一年日本文学	4	8	酒井悌
日文作文	2	4	渡辺善次
日本文学略史	3	6	細井次郎
日本史概要（上）	2	4	陳仲益
日本現代戯曲選読	3	6	川添達人
夜班	1	2	細井次郎
中国文学史	2	4	孫楷第
乙：普通必修科	時間	単位	
国文	5	10	
倫理学	2	4	
英文	3	6	
体育	2	4	

出典：『輔仁大学一覧』1942年度より作成。

科目新設の前年十一月、細井は二週間の予定で東京に行くことになり、その際、柳田宅を訪れる計画があった(70)。それが実際に行われたとしたら、「日本民俗学」の新設にはその影響も考えられるだろう。いずれにしても、直江はこれを日本民俗学普及の好機と捉え、それに対する意気込みを『民間伝承』九－五（一九四三年十月）に寄せた通信で語っている。

九月新学期から一週二時間史学系と日文系の学生に日本民俗学といふ題目で講義することになりました。（中略）講義は支那語でやるつもりです。尚学校に補仁（ママ）生活といふ週刊新聞がありますが、これに九月から昔話採集手帖を翻訳

表20　1943年度輔仁大学日本言語文学部科目一覧

科目名	科目種類	時間	単位	教　員
一年生日本文学	一年必修	4	8	直江広治
日本文学略史		3	6	市川一郎
日本現代戯曲選読		3	6	川添達人
日文作文		2	4	山本捨三
東方精神史		2	4	細井次郎
日本史概要（上）		2	4	陳仲益
中国文学史		2	4	孫楷第
日本現代文学	二年必修	3	6	市川一郎
日本近世文学		3	6	山本捨三
日本民俗学		2	4	直江広治
日本学制史		2	4	藤原英夫
日本史概要（下）		2	4	陳仲益
日文作文		2	4	川添達人
国文		5		
日本文学演習		3	6	傅仲濤
中国戯曲史	二年選択	2	4	趙万里
中国小説史		2	4	孫楷第
唐宋代詩		2	4	顧随

出典：『輔仁大学一覧』1943年度より作成。

表21　1944年度輔仁大学日本言語文学部科目一覧

日本演劇史	万葉集研究
詩文漢訳法	日本文学演習
日本文学名著解題	日本文学研究法
日本上代文学講読	日本上代文学思想研究
日本中世文学講読	高等国文法
日本漢文学史	諸子選読
中日文学比較研究法	中国哲学史

出典：「輔仁檔案」巻467、巻450所収成績カードより作成。

して載せたいと思つております。

確認したところ、「日本民俗学」という科目は史学系の必修と選択科目のいずれにもなかった。おそらく直江は民俗学に関心ある史学系学生が個人的に聴講にくると想定していたのだろう。中国語で教えることにしたのは、まだ日本語で民俗学の授業を理解するほどの言語力がない学生も受講できるという普及への配慮と理解すべきであろう。さらに学内新聞に『昔話採集手帖』の訳文を掲載することで日本民俗学の手法の中国への応用を働きかけている。

一九四四年一月、石田英一郎は新設の西北研究所の次長に任命され、家族連れて赴任するに先立っての準備に一旦張家口に行き、帰りの六月初めに北京の直江宅に四日間泊っていた(71)。東京に戻った石田は柳田を訪れた。『炭焼日記』一九四四年六月十七日条に柳田は「石田英一郎君訪来（中略）北京の直江君より砂糖づけ、紙巻煙草及び雑誌、是には『昔話採集手帖』を訳載す」と記している(72)。

一九四四年度三年生の科目に「日本民俗学」が見当たらないが、前年と同じように二年生を対象に行われていた可能性がある。なお一九四四年九月、輔仁大学の文科大学院に人類学部が新設され、ドイツ系の民族学が主な内容であった。

一九四六年五月二二日付、輔仁大学校長の名義で発行された直江広治の帰国証明書に「本校元日本人教師直江広治先生は、民国三一年九月に来任し、民俗学を教えていた。学問と人となりが優れており、三年間本学や学生との付き合いも良かった。」(73)と書かれている。直江は日本文学や日本語も教えていたが、しかしその教育活動の主要な部分が「民俗学」であると認識されているのである。

直江の日本民俗学教育の効果を考えるには、学生の状況を把握する必要がある。一九四二年開設当時、学部は学生十四名の規模でスタートした（表22参照）。

表22　初年度（1942年）輔仁大学日本言語文学部新入生一覧

氏　名	年齢	本籍	出　身　校	備　考
邱孝石	21	江蘇海門	天津私立達文中学	正式生
王大錚	19	河北天津	天津私立特一中学	正式生
楊振韶	19	山東栄城	青島私立礼賢中学	補欠生
林象賢	22	福建泉州	北京私立育英中学	転学部、41年9月入学*1
陳孝祖	26	山東昌邑	旅順工科大学予備科	特別生、43年末正規生*2、44年傍聴生*3
馮　靖	21	山西平定	山西省立太原師範学校	特別生、43年も在籍*2
羅　廉	22	河北大興	河北省私立潞河中学	特別生
孫彦章	22	山東牟平	吉林第一両級中学	特別生
趙克明	20	河北薊県	北京私立北方中学	特別生
徐振林	33	吉林長春	輔仁大学教育学部	特別生乙
郭文秋（女）	20	大連市	大連市神明高等女校	正式生
崔玉卿（女）	21	山東青島	北京私立北方中学	補欠生
呉元秀（女）	21	浙江呉興	天津日本高等女子中学	特別生
謝儀貞（女）	21	福建閩侯	天津日本高等女子中学	特別生

出典：「輔仁檔案」巻130、巻223により作成。*1は同巻180、*2は同巻182、*3は同巻184による。

注意すべきなのは、数多くの「新入生」が見られるが、しかしその中で正式に在籍した学生（正式生、補欠生）の数が少なく、その年だけの特別生や聴講生が多かった。こうした特別生や聴講生がほとんど一年に集中し、正式の在籍生にも途中で脱落した者がおり、二年、三年になっていくにつれてその学級の学生数が急激に減っていった。

一九四四年時点に、三年生は邱孝石、王大錚、楊振韶、林象賢、崔玉卿（女）、陳孝祖（聴講生）の六人で、二年生は沈彭年、李賡民、褚春栄、趙賢達、範琦、曲純懿（女）、于友文（女）の七人であった。それでも一年の新入生と合わせて日本言語文学学部の一番賑やかな時期を迎えたが、しかし間もなく一九四五年日本が降伏するに伴い、九月七日に日本言語文学部は停止し、日本語は第二外国語として保留されることになった(74)。

輔仁大学の日本言語文学部の存在は一九四二～四四年度のわずか三年間しかなく、この学部からの卒業生がいなかった。初年度一九四二年に入学した学生の内、五人だけは最終年度の一九四五年度に残り、男子学生四名（邱孝石、林象賢、王大錚、楊振韶）は社会学部、女子学生一名（崔玉卿）は哲学学部に

表23　1946年度卒元日本言語文学部学生卒論一覧

氏名	本籍	住　所	卒論タイトル
邱孝石	江蘇海門	北平西城李広橋西街南口8号	「日本文学與外国文学及社会之関係」
林象賢	福建泉州	福建泉州東街支路101号	「近代日本社会」
王大錚	天津市	上海楊樹浦東西華徳路810弄87号	「日本社会対日本文学之影響」
楊振韶	山東栄城	青島市場二路19号	「日本上代社会與文学」

註：崔玉卿（女）は卒業生名簿に名前があるが、論文については不明である。
出典：『輔仁年刊』1946年度により作成。

それぞれ編入され、編入先の学部から卒業した。卒業アルバム『輔仁年刊』一九四六年度によれば、これら日本言語文学学部で三年間勉強した学生の論文タイトルは表23のようである。文学をテーマとするものが多く、民俗学関係のものはなかった。

短い授業期間（二年生必修として続けられたとしても二年間）と講義時間（週に二時間）、言語の障壁（学生の日本語理解力と直江の中国語表現力）、戦争による調査の制限（中国人学生の自由調査が困難）などにより、直江の日本民俗学教育は当時直接には目立った効果を収めなかったようである。しかし影響がなかったわけではない。

新中国が成立後、学問領域としての民俗学はしばらく姿を消していたが、一九七八年夏、七名の高名な教授ら(75)が連名で民俗学研究の回復を提言し、それを受けて同年の社会科学計画会議で、民俗学が二九の学科の一つとして認められた。中国において民俗学はようやく復興を迎えた。翌年、中国民間文芸研究会に「民俗研究部」が創設され、一九八二年六月、中国民俗学会籌備会が開かれた。この籌備会の参加者（計十三名）には王汝瀾（一九二〇年～）という名前が見られる(76)。一九八三年中国民俗学会は正式に発足し、王は最初の会員となり、学会秘書処の初代成員でもあった(77)。一九八三年七月二〇日から一ヶ月、中国民俗学会の初の活動として、民俗学講習班が開かれ、全国から九七名が受講したが、王は講師として「日本民俗学発展概述」を講義し、日本民俗学史を全面的に中国に紹介した最初であった(78)。ほぼ同じ時期に、彼女は後藤興善『民俗学入門』（火星社、一九五〇年）(79)、関敬吾編『民俗学』（角川書店、一九六三年）(80)などの翻訳も手掛け、積極的に日本民俗学の成果を中国に紹介した。

その後の長い間、日本民俗学の翻訳者、紹介者として活躍してきた王はかつて日本に留学し、早稲田大学文学部史学科（東洋史）を卒業してから、東京帝国大学文学部史学科の研究生を経て一九四三年十月に輔仁大学日本言語文学部の日本語専任助手として招聘された経歴を持つ[81]。専任助手の仕事内容は日本人教員の研究補助や講義要旨、レジメの翻訳などであったが、招聘された時期は「日本民俗学」という科目が新設された直後にあたり、彼女の日本民俗学についての関心と素養は当時積極的に日本民俗学の教育、普及活動を展開していた直江に刺激、影響された一面を持つと考えても不自然ではない。

3　東方人類学博物館、エーデルと『民俗学誌』

直江広治の輔仁大学での活動を考えるには、教育活動以外、当大学で一九四〇年に設立された東方人類学博物館（Museum of Oriental Ethnology）との関連も重要である。

一九四一年度の『私立輔仁大学一覧』によれば博物館は「葉徳礼主任、趙衛邦事務員[82]、陳宗祥助理員[83]」という小規模なものであった。その中心人物葉徳礼（エーデル、Matthias Eder）は、ラーマンと同じくシュミットの弟子で、かつてパリやベルリンなどで四年間日本学を研究していた。輔仁大学に赴任してから、日本語や日本文明史などの課目を担当し、琉球方言の翻訳も手掛けていた。

直江が輔仁大学に赴任した一九四二年は、ちょうど博物館の年刊として『民俗学誌』の発行が進められていた頃であった。雑誌の登録申請は十月で、当時の職員には、李慰祖助理員（輔仁大学大学院在学）の名前も見え、保証人は細井次郎であった。雑誌は英語、ドイツ語、フランス語などが混在し、一部英語及び中国語の要約を付けている。創刊号はエーデルによる序言を巻頭に、本文一〇九頁で、主な内容は以下のようである。

シロコゴロフ「中国の民族学研究」

趙邦衛「扶乩の起源と発達」、「中国現代民俗学研究（上）」
Josef Thiel「祈願成就のかたしろ焼き」
陳祥春「駆邪符に関する幾つかの事例」
Karl Reitz「くいはく・みてぐら・ごくい（幣帛）」
エーデルによる二つの書評

雑誌の創刊は早速、直江より柳田に知らされ、そして関敬吾によってで日本の学界に紹介された。

エーデル師の骨折りで大学の博物館には可成りの民俗資料が集つて参りました。又年刊のフオークロア・スタデイズも出ましたし、（先生の御手許に参つて居りません時は早速御送り致します。）これから輔仁が支那民俗学研究の中心になる事と思ひます。私もこれから大いに勉強する積もりで居ります（一九四二年十一月十一日付直江書簡）。

本誌は北京輔仁大学人類学博物館に於て、年刊として本年創刊されたものであり、四六倍版約百頁余であり、編集者は八重山方言の研究者として知られるアライアス（ママ）・エーデル（ママ）である。投稿希望者は独仏英の何れかにより、出来るだけタイプライターによられたしといつてゐる（関敬吾、一九四三年一月『民間伝承』八－九）。

なお、『民俗学誌』は一九四三年、柳田国男の記念特集号を出版した。

一九四九年五月、『民間伝承』一三－五の「同人消息」に「北京補（ママ）仁大学教授エーデル氏来所、Folklore Studies（民俗学誌）の第八冊刊行の準備の為来朝せる由。」「四月四日エーデル氏を囲み座談会を開く。石田、江、大藤、

直江、和歌森、堀、関、神島の諸氏、それに先生も加はれて、終戦後の中国の学界の動向、比較民俗学に於ける日本民俗学の地位、日本民俗学への要望等を語り合つた」とある。その後、エーデルは日本に移住し、この雑誌の出版を継続しており(84)、柳田文庫にも多数所蔵されている。

4　直江広治の中国経験と日本民俗学

直江広治は若い世代に属し、高等師範学校時代に民俗学と出会った頃、日本民俗学の全国的な組織は既に確立され、山村調査も展開されていた。民間伝承の会に入会したとき、海村調査が打ち切られ、国内の大規模な民俗学活動が次第に難しくなりつつあった。そのために太田陸郎や大間知篤三のように初期日本民俗学の組織化や民俗研究に大きく貢献することはできなかった。しかし、日本での活動を中断して中国に赴いた太田と大間知と異なり、直江の場合、中国は早くから研究対象となっている。

日中戦争の衝撃によって中国研究を志した直江は、専攻である東洋史より民俗学のアプローチを選んだ。柳田門下で受けた民俗学の教育と訓練はその意味で中国研究のための準備という側面を持っている。その自然な成行きとして、大学卒業直後、彼は北京に渡ったのである。

北京では早々、彼は日本人による民俗研究同好組織民風会の活動に積極的に参加し、満鉄の調査員山本斌との関係で、華北農村慣行調査に便乗する形で調査を展開しており、資源科学研究所による山西調査の一員にもなっていた。明確に判断できた直江の調査地を整理する結果は図16である。直江の主要調査地はほぼ鉄道沿線に限定し、さらに居住地である北京周辺以外、満鉄の慣行調査の主要地域（河北省、山東省）や山西調査団の行動範囲（山西省）に大きく依存していることがわかる。

戦前直江の中国研究には、太田陸郎のような壮大な文化史的仮設、或いは大間知篤三のような民俗学・民族学に